

## リフレクティング・プロセスの コミュニケーションに関する研究②

～情報の均衡・不均衡がチームのコミュニケーションに与える影響～

三 澤 文 紀

キーワード：リフレクティング・プロセス、コミュニケーションの実証的研究、小集団コミュニケーション、家族療法

### I 問題と目的

リフレクティング・プロセス（「リフレクティング・チーム」とも呼ばれる、以下RP）は、北ノルウェーのアンデルセン（Andersen, 1987;1991）とその同僚が開発した方法であり、心理臨床場面をはじめ、問題解決を目的とする多くの場面で応用可能な方法とされている（Andersen, 1995;三澤・長谷川, 2007;矢原・田代, 2008）。しかし、そのコミュニケーションに関する研究はごく僅かであり、コミュニケーションの特徴は明らかにされてこなかった。そこで筆者（2008）は、RPの形式がチームのコミュニケーションに与える影響を検証した。その結果、小集団のコミュニケーションにおいて参加者間で情報量に不均衡が存在する場合、コミュニケーションが以下のように制限されると考えられた。

- i) 情報の保有者（以下、保有者）を中心とした「質問－回答」のパターンが多く、保有者を含んだ2者間コミュニケーションが多くなる。
- ii) 参加者が自由に発言し、互いの発言に反応しあうコミュニケーションが抑制される。
- iii) 発言数やトピック数が減少する。

これとは反対に、RPでは参加者の情報量がほぼ同じであるため、上記の制限は起きないと考えられた。ただし、筆者（2008）の検証では「情報の均衡・不均衡」を独立変数としていないため、それらが原因となってコミュニケーションが変容するまでは断言できない。また先の研究では、両形式の方法や手続きに比較的忠実に従ったため、両条件間で話し合いに参加する人数が違っている点や、2条件間で言葉遣いに関して違った教示がなされている点などの問題が残っている。

そこで、本研究では情報の「均衡状態」と「不均衡状態」を独立変数とし、以下の仮説を検証することを目的とする。

仮説：小集団コミュニケーションにおいて、参加者間で保有している情報量が不均衡状態の場合、それらが均衡した状態の場合と比較して、コミュニケーションは以下

のような特徴がみられる。

- i) 保有者である「発表者」を中心とした「質問-回答」のパターンが多く、発表者を含んだ2者間コミュニケーションが多くなる。具体的には、質問の比率が多くなり、それに対して保有者が多く回答する。また、2者間の会話から成るトピックが多くなる。
- ii) 参加者が自由に発言し、かつ互いの発言に反応しあうコミュニケーションが抑制される。具体的には、先の発言に付け足す発言に関する項目が少なく、同時発話も少ない。
- iii) 発言数やトピック数が減少する。

## Ⅱ 方 法

### 1. 被験者

被験者は、大学生・大学院生の友人同士3名1チームの計12チーム、36名。

### 2. 実験条件

以下の2条件が設定された。

#### ●均衡条件

均衡条件は、チームの参加者全員がほぼ同じ情報量を持つテーマについて話し合う条件である。具体的には、被験者と面識がない中学生が抱えるトラブルについて、実験者が読み上げる情報資料（後述）を、10分間程度読み上げ（その間、チームは話をしない）、その後、聞き取った情報を基に、チームだけで話し合いを行った。なお、実験の前に、被験者全員がその資料の情報の詳しい内容を知っていないことを確認した。

#### ●不均衡条件

不均衡条件は、チームの中の1名だけが多くの情報量を持つテーマについて話し合う条件である。3名からなるチームの中からランダムに選ばれた被験者1名を発表者として指名し、その1名自身はよく知っているが、他の2名がほとんど知らない「学校で起きたトラブル」についてチームで話し合う。具体的には、最初に、トラブルを知る被験者1名が5～10分間程度そのトラブルについて説明をし（その間、他の2名は話をしない）、その後、それについてチームで話し合いを行った。なお、実験の前に、発表者以外の被験者が、そのトラブルについて詳しく聞いておらず、トラブルの内容を知っていないことを確認した。

### 3. 手続き

- 1) 事前に被験者は、これから話し合うトラブルについて、解決策やアドバイス、コメントや感想、質問等々、どのような発言をしても、またチーム内の誰と話をしようとも、基本的に自由であることが伝えられた。ただし、どのテーマを話す場合でも、登場人物を誹謗中傷する発言は禁止することが教示された。また事前の予備実験にて、提供されたトラブルと関連するような自分の経験談を冗長に話す被験者がいたため、ここでは自分の経験談をあまり長々と話さないように教示された。
- 2) 最初に、被験者チームは一方の条件に従い、トラブルの説明を受け、それに続けて10分間の話し合いを行った。話し合いは、録画された。
- 3) 続いて、被験者チームはもう一方の条件に従い、トラブルの説明を受け、それに続け

て10分間の話し合いを行った。話し合いは、録画された。

[以上の手続きで、均衡条件と不均衡条件の実施は、各組ごとに順序のカウンターバランスを図って実施された。]

4) 録画を元に、従属変数〔後述〕を測定した。

#### 4. 使用する資料

##### (1) 均衡条件の資料

資料は2種類用意された。1つは、クラスの友人2名からの無視を中心としたいじめに悩む中学生女子が学級担任に相談した事例に関する資料、もう1つは、高校進路に関して親と対立している中学生男子がスクールカウンセラーに相談した事例に関する資料である。2つの事例の説明がほぼ同じ長さ(10分間程度の説明)になるよう、資料を作成した。資料には、相談面接でのクライアント(いずれも中学生)に関する情報や相談までの経緯、相談内容に登場するクラスメイトの情報や学校の情報が書かれている。

なお、これらの資料は、各組ごとにどちらか一方のみが提示された。また、被験者に直接提示されることはなく、必ず実験者が口頭で読み上げることにした。これは不均衡条件の資料も口頭で提示されるため、それに揃えたためである。

##### (2) 不均衡条件の資料

「学校で起きたトラブル」を発表する発表者1名には、小学校、中学校、高校で起きたトラブルの中で、詳しく説明できるトラブルを想起してもらうようあらかじめ求めた。そして、実験前にそのトラブルの内容を実験者が確認し、プライバシー保護の観点から固有名詞や個人名を出さないよう、トラブルの説明の仕方をその被験者と協議し、必要に応じて、トラブルの主旨を損なわない程度の加工を施した。実験では、加工済のトラブルについて発表者が口頭で説明した。この際、説明が早く終わってしまった場合は説明を追加するように促し、また説明が長くなりそうであった場合は説明を終了するよう求めるなど、全体で5~10分程度の説明になるよう実験者が調整した。

#### 5. 従属変数

##### (1) 発言とトピックに関する項目：従属変数①~③

###### ① 発言数

話者交替、または明確に判別可能な2秒以上の沈黙を区切りとしてカウントした発言の数である。

###### ② トピック総数

逐語録を基に、内容が前後の文脈の中で相対的に独立した1つ以上の発言を、1つのトピックとしてカウントした。会話の内容の判定や分類に関する先行研究では、複数の判定者の合議による方法(浦・桑原・西田, 1986; 大坊, 2005)が見られる。本研究でも、最初に一部のトピックについて実験者と実験の意図を知らない大学院生1名が独立して判定し、一致率が充分高いとは言えない場合、全てのトピックに関して両者の合議による判定を行うこととした。

###### ③ トピックのレベル別の数

トピックが直前のトピックと密接に関連せずに比較的独立していると判断されるトピックをレベル1とした。また、直前のトピックの内容と密接に関連しながら若干ト

ピックが移行していると判断されたトピックをレベル2とした(表1, 2参照)。トピックレベルの判定については、トピック総数(従属変数②)と同様の手続きで判定を行った。

表1 トピックレベルの例

番号順	発言者と発言	トピック	
発言1	A君: 昨日見つけたラーメン屋が、すごく美味しかったんだよ。	A君の見つけたラーメン屋	レベル1
発言2	B君: え、どこにあったの?		
発言3	A君: 駅前の通りをずっと行って、…(略)		
発言4	B君: その通りに、和食屋があるんじゃないかって?	同じ通りの和食屋	レベル1
発言5	A君: ああ、〇〇亭でしょ?		
発言6	B君: そこもあるけど、△△屋のことを考えていた!		
発言7	A君: □□亭もあるよね?		
発言8	B君: そう考えると、あの通りは和食屋だらけだよ。		
発言9	A君: でも、こないだB君も美味しい所があったって言ってなかった?	B君の見つけたパスタ屋	レベル1
発言10	B君: ああ、ラーメン屋ではなくパスタ屋だよ。		

註: 3つのトピックは直前のトピックと密接に関連していないため、総てレベル1と判定される。従って、レベル1が3つとカウントされる。

表2 トピックレベルの例2

番号順	発言者と発言	トピック	
発言1	A君: 昨日見つけたラーメン屋が、すごく美味しかったんだよ。	A君の見つけたラーメン屋	レベル2
発言2	B君: え、どこにあったの?		
発言3	A君: 駅前の通りをずっと行って、…(略)		
発言4	B君: 何味を食べた?	そのラーメン屋の味	レベル1
発言5	A君: 味噌を食べたけど、これが煮干しのだしを使っていて…(略)		
発言6	B君: 煮干しのだし! 珍しいね。僕、味噌好きなんだよね。		
発言7	A君: 他にも醤油と塩があって、麺の太さも好みで選べて、…(略)		
発言8	B君: そんなに選べるんだ! 醤油も食べてみたいけど、…(略)		
発言9	A君: でも、こないだB君も美味しい所があったって言ってなかった?	B君の見つけたパスタ屋	レベル1
発言10	B君: ああ、ラーメン屋ではなくパスタ屋だよ。		

註: 発言4~8は、直前の発言1~3のトピック「A君の見つけたラーメン屋」と密接に関連するトピックであるが、トピック自体は「そのラーメン屋の味」へと移行している。このため、発言1~3と発言4~8はレベル2と判定される。また、発言1~8を通して、「A君の見つけたラーメン屋」のトピックに関連しているため、全体で1つのレベル1のトピックと判定される。従って、レベル1のトピックが全体で2つと、レベル2が全体で2つとカウントされる。

## (2) 質問と回答に関する項目：従属変数④～⑤

## ④質問

ここでは「質問」を、発言の区切りにおいて上昇イントネーションがみられ、かつ何らかの事実確認や情報提供を求めることを内容として含む発言、あるいは、「～について教えて下さい」「～を知りたいんですが」など、何らかの事実確認や情報提供を求めていることが明らかな内容の発言と定義した。この定義に基づいて質問を判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

## ⑤最多回答者の回答数

発言の内容から、各質問に対する回答と見なされる発言を判定した。そして、各話し合いの中で質問に最も多く回答している参加者を同定し、その回答数をカウントし、全回答数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

## (3) 参加人数別トピック数に関する項目：従属変数⑥

## ⑥参加人数別トピック数

各トピックの中で、発言している人数（のべ人数ではない）を調べた。それに基づき、各トピックを「1名のみ参加」、「2名参加」、「3名参加」のカテゴリーに分けてカウントした。

## (4) 付け足す発言と同時発話に関する項目：従属変数⑦～⑩

## ⑦自発的同意

自分以外の参加者の発言に対して、賛否を求められたことによるものではなく自発的に賛成、あるいは肯定的な理解を表している発言。この定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

## ⑧補足

自分以外の参加者の発言に対して、その内容に情報を付加する発言。他者の発言が途中で終わって、それに情報を追加する場合も含む。この定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

## ⑨言い換え

自分以外の参加者の発言後に、内容はほぼ同じままであるが、言い方や表現の仕方を変更している発言。この定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

## ⑩同時発話

発言が重なっている状態。この定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

### Ⅲ 結果

従属変数の判定に関しては、次のように進められた。発言数、参加人数別トピック数以外の従属変数に関しては、ランダムに抜き出した連続する30発言×4組（各条件2組ずつ）＝120発言について、実験者と実験の意図を知らない大学生1名との判定の一致率（ $\kappa$ 係数）を求めた。その結果、トピック総数以外の従属変数については高い一致率が得られた（質問  $\kappa = .919$ 、回答  $\kappa = .885$ 、自発的同意  $\kappa = .885$ 、補足  $\kappa = .787$ 、言い換え  $\kappa = .866$ 、同時発話  $\kappa = .976$ 、密着  $\kappa = .911$ ）。そのため、一致率の高かった従属変数について、以後の分析では1名の判定者単独で判定を行った。トピック総数の判定については一致率が充分高くなかったため（ $\kappa = .413$ ）、トピックに関する変数は2名の合議によって判定された。

#### 1. 発言とトピックに関する項目：従属変数①～③

##### ①発言数

発言数の結果を、表3に示す。両条件の結果に関して対応のあるt検定（片側）による比較を実施した。その結果、有意差がみられ（ $t_{(11)} = 2.88$ ,  $p < .01$ ）、均衡条件の発言数がより多いことが明らかとなった。

##### ②トピック総数

トピック総数の結果を、表3に示す。トピック総数に関して、対応のあるt検定（片側）による比較を実施した。その結果、有意差がみられ（ $t_{(11)} = 4.34$ ,  $p < .001$ ）、不均衡条件と比較したとき、均衡条件では一定時間内に多くのトピックを産出することが明らかとなった。

##### ③トピックレベル

トピックレベルの結果を、表3に示す。トピックレベルに関して、対応のあるt検定（片側）による比較を実施した。その結果、レベル1では有意傾向がみられ（ $t_{(11)} = -1.67$ ,  $p < .10$ ）、不均衡条件でより多い傾向が示唆された。また、レベル2では有意差がみられ（ $t_{(11)} = 9.38$ ,  $p < .001$ ）、均衡条件でより多いことが明らかとなった。

以上の従属変数①～③の結果から、均衡条件では発言数がより多く、直前のトピックと関連がある比較的小さいトピックの産出数が多く、その一方で不均衡条件では発言数がより少なく、比較的大きなトピックの産出が多い傾向が明らかとなった。これらの結果は、

表3 各条件における従属変数①～③の値

	均衡条件		不均衡条件		
	M	SD	M	SD	
①発言数	108.8**	38.8	93.3	33.6	
②トピック総数	23.4***	4.8	19.3	4.6	
③トピック レベル	レベル1	11.2	5.6	13.8†	3.6
	レベル2	18.4***	5.0	9.2	3.0

†  $p < .10$ ; \*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$ ; \*\*\*  $p < .001$

全体としては先行研究（三澤・板倉，2009）とほぼ対応する結果と考えられる。

## 2. 質問と回答に関する項目：従属変数④～⑤

### ④質問

質問が全発言数に占める比率の結果を、表4に示す。この変数は正規性に疑いが推測されることから、ノンパラメトリック検定を行うこととした。Wilcoxonの符号付き順位和検定（片側）による比較を実施した結果、有意差がみられ（ $z=-2.43$ ,  $p<.01$ ）、不均衡条件でより多いことが明らかとなった。

### ⑤最多回答者の回答数

最多回答者の回答数が全回答に占める比率の結果を、表4に示す。この変数は正規性に疑いが推測されることから、ノンパラメトリック検定を行うこととした。Wilcoxonの符号付き順位和検定（片側）による比較を実施した結果、有意差がみられ（ $z=-2.24$ ,  $p<.05$ ）、不均衡条件でより多いことが明らかとなった。

また、自由検討条件の最多回答者は、総てのケース発表者役であった。

従属変数④、⑤の結果から、不均衡条件では発表者以外が質問をし、発表者が回答するというパターンが、均衡条件よりも比較的多くみられることが明らかとなった。これは、先行研究（三澤，2008）の結果と同様の結果と考えられる。

## 3. 参加人数別トピック数に関する項目：従属変数⑥

### ⑥参加人数別トピック数

参加人数別トピック数の結果を、表5に示す。この結果に関して $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差がみられた（ $\chi^2(2)=7.13$ ,  $p<.05$ ）。その後の残差分析から、不均衡条件では「2名」が参加したトピック数が期待値より多く（ $p<.01$ ）、「3名」は少ないという結果が得られた（ $p<.05$ ）。これとは逆に、リフレクティング条件では、「2名」が参加したトピック数が期待値より少なく（ $p<.01$ ）、「3名」が多いという結果が得られた（ $p<.05$ ）。なお、「1名」については有意差がみられなかった。

また、「2名」が参加したトピック数に関して、不均衡条件の発表者が参加している

表4 各条件における従属変数⑥～⑨の統計値（%）

	均 衡 条 件				不 均 衡 条 件			
	Me	IQR	M	SD	Me	IQR	M	SD
④質問	6.6	3.80	8.3	6.84	17.2**	16.09	17.6	8.80
⑤最多回答者の回答数	55.0	22.22	60.6	20.60	83.0*	14.18	80.8	16.10
⑦自発的同意	11.6**	13.22	13.9	7.44	3.0	8.18	5.6	5.92
⑧補足	2.6**	1.52	3.0	1.18	0.7	1.38	0.8	0.82
⑨言い換え	3.3*	2.32	3.4	2.07	1.6	1.45	2.1	1.48
⑩同時発話	14.5*	10.84	14.7	6.16	12.3	4.69	12.8	5.51

†  $p<.10$ ; \*  $p<.05$ ; \*\*  $p<.01$

表5 参加人数別トピック数（従属変数⑥）

		話 者 人 数			合 計
		1 人	2 人	3 人	
均 衡 条 件	度 数	25.00	130.00	127.00	282.00
	期 待 度 数	21.40	144.84	115.76	282.00
	調 整 済 み 残 差	1.21	-2.63**	2.02*	
不 均 衡 条 件	度 数	14.00	134.00	84.00	232.00
	期 待 度 数	17.60	119.16	95.24	232.00
	調 整 済 み 残 差	-1.21	2.63**	-2.02*	
合 計	度 数	39.00	264.00	211.00	514.00

\*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$ 

トピック数は、その全体の94.0%であり、「2名」が参加したトピックのほとんどに発表者が参加していた。一方、その発表者が均衡条件（発表者としてでなく通常の被験者として参加）で参加しているトピック数は、その全体の78.5%であり、不均衡条件を下回っていた。

従属変数⑥の結果から、不均衡条件では、1つのトピックが2名の会話で成り立っている場合が比較的多く、その多くに発表者が加わっていることが明らかとなった。それに対して均衡条件では、1つのトピックが3名以上の会話で成り立っていることが比較的多いことが明らかとなった。これらについても、先行研究（三澤, 2008）と同様の結果と考えられる。

#### 4. 付け足す発言と同時発話に関する項目：従属変数⑦～⑩

##### ⑦自発的同意

自発的同意が全発言数に占める比率の結果を、表4に示す。この変数は正規性に疑いが推測されることから、ノンパラメトリック検定を行うこととした。Wilcoxonの符号付き順位和検定（片側）による比較を実施した結果、有意差がみられ（ $z=3.06$ ,  $p < .01$ ）、均衡条件でより多いことが明らかとなった。

##### ⑧補足

補足が全発言数に占める比率の結果を、表4に示す。この変数は正規性に疑いが推測されることから、ノンパラメトリック検定を行うこととした。Wilcoxonの符号付き順位和検定（片側）による比較を実施した結果、有意差がみられ（ $z=3.06$ ,  $p < .01$ ）、均衡条件でより多いことが明らかとなった。

##### ⑨言い換え

同意が前発言数に占める比率の結果を、表4に示す。この変数は正規性に疑いが推測されることから、ノンパラメトリック検定を行うこととした。Wilcoxonの符号付き順位和検定（片側）による比較を実施した結果、有意差がみられ（ $z=1.73$ ,  $p < .05$ ）、均衡条件でより多いことが明らかとなった。

#### ⑩同時発話

同時発話が全発言数に占める比率の結果を、表4に示す。この変数は正規性に疑いが推測されることから、ノンパラメトリック検定を行うこととした。Wilcoxonの符号付き順位和検定(片側)による比較を実施した結果、有意差がみられ( $z=1.65$ ,  $p<.05$ )、均衡条件でより多いことが明らかとなった。

従属変数⑦～⑩の結果から、均衡条件では不均衡条件と比較して、ある発言に対して別の参加者が付け足す発言が多く行い、同時に参加者同士が同時に発話する場面も多いことが明らかとなった。これは、先行研究(三澤, 2008)で「言い換え」に関して有意差がみられる傾向( $p<.10$ )であったものが、本研究では有意差がみられた( $p<.01$ )という点を除けば、今回の研究と先行研究の結果は同様の結果であると考えられる。

## Ⅳ 考 察

### 1. 本研究の結果について

本研究では、情報の「均衡状態」と「不均衡状態」を独立変数として、その違いによってコミュニケーションが異なるかどうかの検証を試みた。その結果は、ほぼ仮説を支持するものであったと考えられる。

仮説の i) に関係する従属変数については、仮説どおりの結果が得られた。つまり、不均衡条件で全発言に占める質問の比率は、均衡条件のそれよりも多いという結果が得られた。また、不均衡条件では質問に最も多く回答しているのは発表者、つまり情報の保有者であったが、その発表者が全回答に占める比率は、均衡条件のそれよりも多かった。さらに、均衡条件では「2名」の会話から成るトピックの数が比較的多く、しかもそれらのトピックの9割以上には発表者が話し手として加わっていた。このことから、情報の不均衡によってコミュニケーションの制限が起きていることは明らかである。反対に、均衡条件ではこれとは逆の現象が起きていることが明らかとなった。つまり、質問とその回答のパターンは比較的少なく、「2名」の会話から成るトピックが比較的少なく、代わりに「3名」の会話から成るトピックが比較的多いことが確認された。尚、不均衡条件で発表者を務めた被験者は、均衡条件の「2名」の会話から成るトピック数でも参加率が7割を越えており、意外と多い印象を受ける。これは、実験の際、発表者を務めた被験者だけを事前に呼んで発表への教示を特別に行う必要があり、そのため実験での中心的な役割を任されていると感じたことによるものと考えられる。事実、それら被験者は「自分が会話を盛り上げないといけないと思った。」「沈黙はよくないと思って、進んで何かしゃべるようにした。」といった感想を実験後に語っていた。均衡条件では「全員自由に」という点を強調したが、被験者は無意識のうちに率先して発言したと考えられる。しかし不均衡条件では、それさらに上回る発言が発表者を務めた被験者からなされており、不均衡条件では発表者がコミュニケーションの中心となっていることは明らかである。

仮説の ii) に関係する従属変数の結果について、以下のように考えられる。

まず、同時発話に関しては、不均衡条件では均衡条件より少なく、仮説と一致する結果であった。従って、不均衡条件と比較して、均衡条件において参加者がより自由に発言することができると考えられ、仮説どおりであると結論づけられる。

また、仮説の ii) の「他者の発言に反応しあうコミュニケーション」に関しては、「自発的同意」「補足」「言い換え」の総てにおいて、不均衡条件では均衡条件より少なく、仮説と一致する結果となった。つまり、不均衡条件では他者の発言に対して、求められた反応でない自発的な同意を示す発言、他者の発言に対する補足的発言、他者の発言の表現を言い換える発言が、均衡条件よりもあまり見られないことが明らかとなった。もしもこうした発言が活発に行われた場合、1つの発言に対して関連する発言が連なり、その結果、1つのテーマに関して少しずつ違ったトピックが産出されやすく、トピック産出は促進されると考えられる。しかし不均衡条件では、情報を保有者（発表者）が持ち合わせているため、質問や意見に対して保有者が答えやすく、しかも保有者が答えてしまえばそれが「正答」とみなされ、他の参加者は発言を付け加えにくいと考えられる。その結果、トピックの産出の抑制につながると考えられる。

仮説の iii) に関係する従属変数については、仮説どおりの結果が得られた。つまり、不均衡条件においては、発言数とトピック数が均衡条件よりも少ないという結果が得られた。これは、先の i), ii) で明らかなどおり、不均衡条件では自由に発言することが比較的難しく、しかも相手の発言に対して同意したり、補足したり、言い換えたりといった発言がしにくいと、結果的に発言数やトピック数が減少したと考えられる。反対に、均衡条件では、自由に発言し、相手の発言に対しても自由に反応して発言できることから、結果的に発言数やトピック数が多く産出されやすいと考えられる。

## 2. 先行研究との比較

先行研究（三澤，2008；三澤・板倉，2009）では、より実際の形式に近いように実験を行ったため、話し合いをする人数の違いや両条件での教示の違いが生じてしまった。このため、情報の均衡・不均衡によってそのような結果になったのか、それともその他の違いによってその結果になったのか、明確には結論が出せずにいた。それら問題点を踏まえ、被験者チームの両条件で人数や教示等の状況設定を最大限に等しくし、情報の均衡・不均衡自体を独立変数とした本研究が計画された。本研究の2つの実験条件である均衡条件、不均衡条件は、それぞれリフレクティング・プロセス形式、自由検討形式のコンサルテーションと対応している。本研究の結果からは、先行研究とほぼ一致する結果が得られており、情報の不均衡が仮説で述べられているようなコミュニケーションの制限を引き起こしていることが明確になったといえる。

以上のことから、チーム内での情報の保有量が均衡状態になるRP形式の話し合いでは、より多くのトピックが産出される自由なコミュニケーションが展開すると結論づけられる。

## 3. 本研究の限界と残された課題

本研究の実験状況や人数等は、実際に行われるであろう状況を想定して設定された。このため、これ以外の状況、例えば多人数が参加した状況、あるいは心理臨床以外での状況等は今回の目的を越えており、十分に検証されていない。しかし、リフレクティング・プロセスの応用可能性を考えると、他の状況下でも同じ結果が得られるのか重要な意味を持つことから、今後の検証が望まれる。

## 謝 辞

本研究は、文部科学省科研費（課題番号20730451）の助成を受けたものである。本研究に御参加いただいた皆様に御礼申し上げます。

## 引用文献

- Andersen, T. 1987 The reflecting team. *Family Process*, 26, 415-428.
- Andersen, T. 1991 The reflecting team-dialogues and dialogues about the dialogues. New York: W. W. Norton. (鈴木浩二監訳 2001 リフレクティング・プロセス—会話における会話と会話. 金剛出版)
- Andersen, T. 1995 Reflecting processes; acts of informing and forming: You can borrow my eyes, but you must not take them away from me! In Friedman, S. (Ed). *The reflecting team in action: Collaborative practice in family therapy*. New York: Guilford Press. pp. 11-37.
- 大坊郁夫 (編著) 2005 社会的スキルの向上をめざす対人コミュニケーション. ナカニシヤ出版.
- 三澤文紀 2007 リフレクティング・プロセスに関する基礎研究：そこではどんな相互作用が起きているか？ 日本家族心理学会第24回大会プログラム・発表抄録集 pp. 26-27.
- 三澤文紀 2008 リフレクティング・プロセスのコミュニケーションに関する研究. 茨城キリスト教大学紀要, 42号, 257-268.
- 三澤文紀・長谷川啓三 2007 家族療法を応用したケースコンサルテーション. 村山正治・滝口俊子 編 事例に学ぶスクールカウンセリングの実際. 創元社 pp. 213-225.
- 三澤文紀・板倉憲政 2009 リフレクティング・プロセスにおけるコミュニケーション形式の効果に関する研究. 東北教育心理学研究, 11, (印刷中).
- 浦光博・桑原尚史・西田公昭 1986 対人相互作用における会話の質的分析. 実験者会心理学研究, 26(1), 35-46.
- 矢原隆行・田代順 (編著) 2008 ナラティブからコミュニケーションへ：リフレクティング・プロセスの実際. 弘文堂

The Study on The Communication of Reflecting Process II  
the effect of restriction by informational asymmetry on the teams of Reflecting Process.

Fuminori Misawa

The purpose of this study was to investigate the effect of restriction by informational and selective asymmetry on the teams of REFLECTING PROCESS (RP). 36 undergraduate and graduate students formed 12 teams (1 team consisted of 3 students). Each team members talked each other according to one of two experimental conditions, the Symmetry Condition (SC) and the Assymetry Condition (AC). Under the SC, each team members talked about the trouble case of junior high school students, which they did not know in detail until the experimenter explained. In other word, they had information of the case equally under the SC. Under the AC, one member of each team explained the well-informed trouble case of school, which other two members did not know in detail, and then all three members talked about the case. In other word, under the AC, only one member had much information of the case than other two members had.

The results were as follow: the communication under the SC was characterized by fewer questions, frequent simultaneous utterances, many additional utterances, and many topics than that under the AC. These showed that informational symmetry and asymmetry between the members in small group influenced their communication, especially the number of topics. And, RP, which actualize the SC, is a form that facilitates free discussion and reinforces production of topics.

Keywords: REFLECTING PROCESS, Empirical Study of Communication, Communication in Small Group, Family Therapy